

News Letter

vol.58 9/28 全学 FD・SD 開催報告特集号

三重大学 高等教育デザイン・推進機構

2021.10

全学 FD・SD/FFP「教育と研究の両立に関する高等教育の在り方—R-T-S ネクサスを中心に—」

2021年9月28日(火)の15:00から17:00まで、全学FD・SD/FFP「教育と研究の両立に関する高等教育の在り方—R-T-S ネクサスを中心に—」を三重大学高等教育デザイン・推進機構が主催し、オンラインで行いました。三重大学の学部・大学院だけでなく、地域イノベーション学研究科や教養教育院、医学部附属病院等の教職員や学生87名が参加しました。

FD(Faculty Development)とは、大学教員の授業の内容や方法を改善し、向上させる

ために行う組織的な取り組みです。

この講演会を開催した目的は、教育と研究の両立に関する高等教育の在り方をR-T-Sネクサスの観点からとらえ、学修者本位の教育の実現・質保証の確立について改めて考えるためです。

三重大学の伊藤正明学長の開会挨拶に続き、高等教育デザイン・推進機構の苅田修一副機構長より講師の有本章氏の紹介がありました。

有本章教授(兵庫大学高等教育研究センター長、同学長

顧問)のご講演では、以下の4点について具体的にお話しいただきました。

- 1) R-T-S ネクサスの意味
 - 2) 大学教員の R-T-S ネクサスへの同調に関する研究
 - 3) 世界と日本における大学教員のネクサスへの同調の動向
 - 4) 日本の大学における最近の動向—私立大学の事例
- 最後に、高等教育デザイン・推進機構の鶴原清志機構長から閉会挨拶があり、非常に有意義なセミナーとなりました。

Vol.58

9/28 全学 FD・SD 開催報告特集号

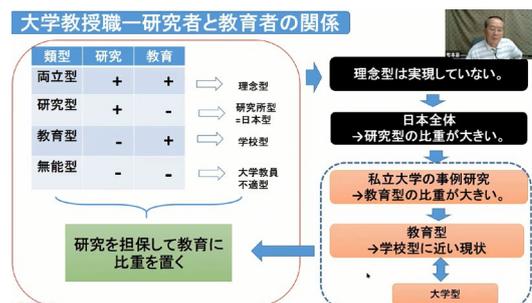
・全学 FD・SD/FFP
「教育と研究の両立に関する高等教育の在り方—R-T-S ネクサスを中心に—」

- ・今回の FD・SD 開催趣旨
- ・教育と研究の両立に関する高等教育の在り方
①②
- ・まとめ
- ・インターンシップ学生の皆さんの感想



左: オンラインの中継メイン会場となった CeMDS

下: 講演の一場面





伊藤正明 学長の開会挨拶



苅田修一 高等教育デザイン・推進機構副機構長の講師紹介

今回のFD・SD開催趣旨

近年、グローバル化の進展や新型コロナウイルスの感染拡大に代表されるように、不確実な時代が突如到来しており、世界的規模で社会と価値観が激しく変化しています。それを受け、現在の、そして未来の大学が果たすべき社会的責任もまた変化する必要性に迫られています。

「教学マネジメント指針」は「予測困難な時代を生き抜く自律的な学修者を育成するためには、学修者本位の教育への転換が必要」としていますが、「教育活動に用いることができる学内及び学生の資源は有限であるという視点」を持ちながら学修者本位の教育を実現し、教育の質保証を確立できるような高等教育の在り方を考える必要があります。

本講演会では兵庫大学・兵庫大学短期大学部 HU 高等教育研究センター長・教授、学長顧問の有本章氏をお招きし、こうした大学を取りまく情勢を意識しつつ、これまでの高等教育の理念や役割等経緯を総括したうえで、教育と研究の両立に関する高等教育の在り

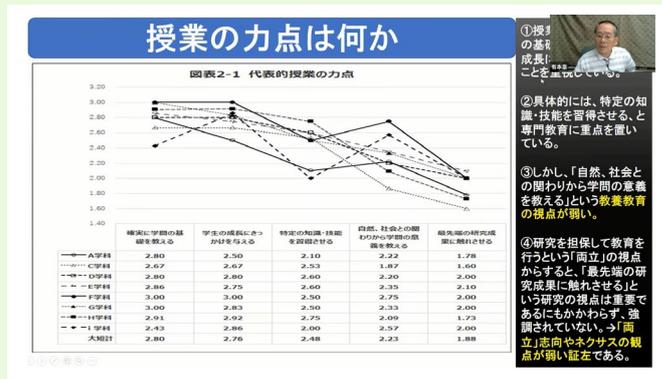
方について R-T-S ネクサスの観点からとらえ、学修者本位の教育へ転換、予測不可能な時代を生きる人材像の輩出しに向けた 2040 年に本学の目指すべき姿を共に考える機会を提供していただきました。次のセクションより講演の概要をまとめます。

教育と研究の両立に関する 高等教育の在り方: R-T-Sネクサスを中心に

有本章
兵庫大学学長顧問
高等教育研究センター長・教授

三重大学研修会、2021年9月28日

教育と研究に関する高等教育の在り方①



大学は教育機関であり、研究機関でもあります。ゆえに、学生への教育へ充てる時間と研究に充てる時間のバランスが重要です。

大学は研究と教育の観点から 3 つのタイプに分けられます。

研究を中心としている研究志向、教育に重きを置いている教育志向、そして研究と教育

のどちらにも力を注いでいる研究・教育両立志向となります。

日本はこの中では研究志向のドイツ型に分類され、それは研究と教育の両立が出来ていないことを示しています。

しかし、研究志向が高いとされている日本の大学の中でも、私立大学の教育志向は上昇しています。

私立大学に注目して考えると、約 5:5 付近のアングロサクソン型となっていますが、日本全体で見ると、研究志向と教育志向の比率は約 7:3 になります。その上、日本の大学は R-T-S ネクサスの実現困難性が高いともされています(約 50%)。



鶴原清志 教育担当理事・高等教育デザイン・推進機構長の閉会挨拶

教育と研究に関する高等教育の在り方②

また、日本含め世界では、**「R-T-S ネクサス」が1世紀以上実現していないという一面があります。**日本の大学は研究を重視しますが、後世に研究が基に、学力や創造性問題解決を伝わるように、教育により注力力を生み出したり、専門としてし、それに加え研究において

もそこから学べる創造性などの社会において必須となる能力を身に付けさせるような教育をすべきであるとされています。



まとめ

今回の有本先生の講演では、日本の大学における高等教育機関としての特徴や教員ならびに学生の教育に対する意識調査などを踏まえ、以下のような結論が提示されました。

(1) R-T-S ネクサスの概念は提唱されて以来今日まで十分に実現されておらず、特に日本では研究偏重の傾向が依然として強い。

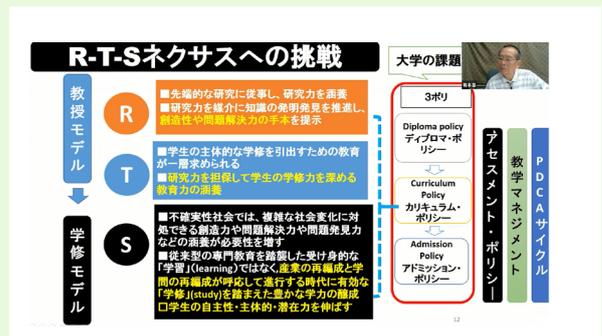
(2) 21世紀においては高等教育の大衆化に伴い、より多様な学生に対応して教育の水準を高める必要があるが、現状では従来の教授モデルから学修モデルへの転換は教員、学生ともに進んでいない。

(3) 20世紀において日本は「学問生産性」を巡る競争で理工系分野では米国に次ぐ地位であったが、近年は急速に凋落の一途を辿っており、これには日本の大学の研究と教育の両立の遅れ、R-T-S ネクサスの停滞が関係している。

(4) 19世紀以降、米国が研究を主軸とする「ドイツモデル」を批判的に導入し普遍主義に基づいた「米国モデル」を形成し、結果としてR-T-S ネクサスの実現に至ったのに対し、特殊主義に基づき「国家の大学」として「ドイツモデル」を踏襲した「日本モデル」は今日に至るまでR-T-S ネクサスの実現に至っていない。

(5) 米国や英国の大学が高水準の研究・教育の両立を実現している今日、日本の大学もまたそれに見倣う形で世界に開かれた「学問の大学」を標榜する方向へ改革を行う必要がある。

有本先生には予定の時間を越えて大変熱意のこもったご講演をいただき、参加者の皆さまからのアンケートでも講演の内容に関して多くの方から高評の声をいただきました。また、講演では当初予定されていた質疑応答の時間を十分に設けることができず、参加者の皆さまからのアンケートでも厳しいご意見を複数いただきました。この場を借りてお詫び申し上げます。高等教育デザイン・開発機構としては、今回お寄せいただいた貴重なご意見をもとに、より良い企画を今後も開発していきたいと思



編集後記

三重大学高等教育デザイン・推進機構ニューズレター「9/28 全学 FD・SD 開催報告特集号」をお届けします。

この特集号は、9/28～9/29 に学務部教務チームにてインターンシッププログラムに参加された学生の皆さんに作成いただいたものをベースとして、高等教育デザイン開発・IRセンターで加筆修正したものです。

学生の皆さんはオンラインでのインターンシップという困難な状況であったにも関わらず、当該全学 FD・SD に参加した経験を、限られた時間の中で、またそれぞれの視点を活かして、非常によくまとめていただいたと感じています。御参加いただいた学生の皆さんにはこの場を借りて御礼申し上げますとともに、皆さんの学生生活がさらに実り多きものになりますようお願いしております。

インターンシップ学生の皆さんの感想

講演会を通して、グローバル化の進展によって国際競争力の重要性が増す今日において大学が求められる改革やその具体的な現状、今後の展望を知ることが出来、大変貴重な機会となりました。教職員、学生とそれぞれの立場から大学全体の高等教育機関としての成熟度を高め、より広い視野を持った研究や教育、学修を意識したいと思いました。

【人文学部3年、阿部宏雅】

私は、コロナ禍によって授業形態が変化し、先生からの解説を一方的に聴くことが増えたことでどうしても受動的になっていました。しかし、有本氏のご講演を受けさせていただいたことで、高等教育において、教育と研究の両立を実現するためには、予習・復習やアクティブラーニングへ能動的に参加することで自主性を養うことが学生には大切だと学びました。そして、これからの不確定的な社会に対応するための創造性や問題解決力を身に着けることが重要だと理解することができました。授業への意識を見直すよい機会となりました。

【人文学部3年、吉田朋生】

有本先生のお話を聞かせていただくまでは、学生の自主性が大切だということは頭にはありつつも、どうしても受動的な姿勢になっている自分がいた。本講演を終えて、大学、そして高等教育機関では、「教わる」姿勢よりも「学ぶ」姿勢が何よりも必要で、将来の自分の力になってくれるのだと感じた。そして、その思いを残された大学生活で活かすだけでなく、社会に出た後も活かしたり、伝えていきたいと感じた。

【人文学部3年、西川萌里】

講演会で、世界の大学の現状、そして日本の大学が抱える問題など、多くのことを知ることができました。これまでは、学生の視点からでしか大学での教育について考えていませんでしたが、大学教員や職員が高等教育に対してどのような考えを持っているのかを知ることができました。得た知識をもとに、今後の大学生活をどのように送っていくべきなのか、後悔のないようにしたいと感じました。

【生物資源学部2年、山口由実伽】

今回の FD に参加し、日本の大学生の予習復習時間が足りていないということを知りました。

アルバイトやサークルに注力している人も、講義の予習復習に注力している人も、それ以外のことも手に付けようとするとう時間と体力が足りない状態であり、どれかを選んで注力しなければならない状態である、という点において同じであると思いました。

だからと言って取得単位を絞ると卒業までの単位が足りなくなってしまうという矛盾になってしまいます。なので一期における取得単位数も少なくし過ぎてはいけません。

注力するものは人によって違いますし、サークルやバイトも学習も全部に注力しなければならないという意識から変え、サークルやバイトを程々にし、学習を最優先にするという意識も必要になってくるのではないかと思います。

【生物資源学部2年、松村祐里香】

News Letter vol.58
2021年10月発行

国立大学法人三重大学
高等教育デザイン・開発機構

〒514-8507
三重県津市栗真町屋町 1577
TEL: 059-231-5615
FAX: 059-231-9058
E-Mail:
kyomu-k@ab.mie-u.ac.jp
HP:
<https://www.hedp.mie-u.ac.jp/>